

時とは一体なんぞでせう それはわたしのこころの神秘です (鮎川信夫「落葉」)

宮崎 真素美(日本文化学部国語国文学科)

■すべてが溶ける 西田幾多郎『日本文化の問題』(1940)

我々は此世界を空間的・時間的と考へる。空間的と云ふのは、物と物とが何処までも並列的に相対立することである。時間的と云ふことは、対立する物と物とが一つとなつて行くことである。時とは何処までも相対立するものの統一の形式であるのである。普通には時は直線と考へられる。時に於ては対立と云ふものはない、時は瞬間から瞬間へと変じ行くと考へられる。併し何処までも前後に関係なく単に瞬間から瞬間へと云ふならば、時と云ふものも成立せぬ。時の現在に於ては、過去は既に過ぎ去つたものでありながら未だ過ぎ去らないものであり、未来は未だ来らざるものであるが既に現れて居ると考へなければならぬ。然らざれば、時と云ふものは考へられない。瞬間から瞬間へと云ふことは、かゝる時の形式に於て現在を極小とすることによつて考へられるのである。かゝる意味に於ては、時は空間的と考へられねばならない。併し時に於てはすべてが溶されて行くのである。何処までも空間的と考へても、すべてが一つの時に於てであると考へられるかぎり、真に物と物との対立と云ふことはない。従つて働くと云ふことはない。物と物とが相働く世界、力の世界と云ふのは、何処までも時間的なると共に空間的、何処までも空間的なると共に時間的なる世界でなければならぬ。時間と空間との矛盾的自己同一の世界でなければならぬ。力の世界に於て物と物とが相働くことによつて一結果を生ずると云ふことは、一面に時に於て物と物との対立が否定せられて行くことではなければならない。而してそれは又一面に逆に空間に於て物と物とが対立することではなければならない。故に力の世界に於て、空間的に物と物とが対立すると云ふことは、時に於てそれが一となつて行くことではなければならない。力が亡び行くことが生れること、生れることが亡び行くことではなければならない。

■こころの神秘 鮎川信夫「落葉」(1949)

わたしの大きな瞳には
まだ悲しいひとつの顔が浮んだり消えたりしてゐるのに
暗い空の枯れた林から落葉がすまなく降つてきます
街のともし灯も
明るいひとびとの笑顔も
みんな灰色の壁にぬりこめられてしまつて
わたしのからだのなかに黄昏がいつぱいつまつて
黄ろい髪飾だけがふわふわと蝶のやうに宙にさまよつてゐるのです
わたしはわたしの行方を知つてゐない
(中略)
わたしの歩いてきた道は
夕陽の果に燃えつきて
わたしはわたしの影を背負ひます
時とは一体なんぞでせう
それはわたしのこころの神秘です
(中略)
わたしは一日よりもはかない一年を
一年よりもむなししい一生を過ごしてきました
始めがあつて終りがあるのでなく
なんでも終末があつて発端があるのでせう
しかし落葉のなかでふりかえつても
淋しいわたしの足跡は落葉に埋つて見えません
ああ世界が暗くなつてゆきます
降りつづく落葉の雨のなかから
永遠の星 花 鳥 樹 魚などの
不思議な夢がしだいに近よつてくるやうです
美しく繊細で やさしかつたお姉さん!
夢を見ながら眠る習慣が こんなに悲しいものとは思ひませんでした
わたしの髪に わたしの肩に 落葉はしずかにつもります
お墓のなかでお目覚めになつてゐるお姉さん!
木の葉になつたわたしには
なんにもわからない わからぬ
あなたのお顔も だんだん忘れてゆきさうです
一九四八年十一月

■終局としての今 T.S.エリオット「パート・ノートン」(1936)(上田保・鍵谷幸信訳『エリオット詩集』1982)

現在の時間と過去の時間は
おそらく未来の時間の中では現在となる
また未来の時間は過去の時間の中に含まれる。
もし凡ての時間は永遠に現在ならば
凡ての時間は贖うことができない。
かつてあつたかもしれないものは
ただ冥想の世界のみ永遠の可能性を残すひとつの抽象なのだ。
かつてあつたかもしれないもの あつたものは
ひとつの終局を指している
常に現在というものを。
(中略)
過去の時間
と未来の時間は
ほんの少しの意識だけを許している
意識することは時間の中にあることではない
しかし時間の中だけでバラ園の中の瞬間も
雨うちつけるあずまやの中の瞬間も
煙たち隙間風が吹く教会の瞬間も
想い起される。過去と未来に包まれて
ただ時間によつてのみ時間が征服され得るのだ。
(中略)
言葉は動く 音楽は動く
ただ時間の中だけで だが ただ生きているものは
ただ死ぬだけだ
話された後の言葉は
沈黙に達する
ただ形とパターンによるだけで
言葉と音楽は
静寂に達するのだ
支那の壺が静寂の中で永遠にたえず動くように。
音の続いている時のヴァイオリンの静寂でも
それだけでもなく 二つがあるのだ
或は終りは始まりに先行する。
そして終りと始まりとは常にそこにあつた
始まりの前に 終りの後にある。
(後略)